



十河雅典ステップス三度目の個展は、200号4枚組を中心に中型作品2点、小品1点、写真1点という構成であった。画廊内に展示されている四枚組の迫力が、兎に角凄い。写真で見れば左が「国家」、右が「言葉」であることは直ぐに理解できるが、引きが取れないギャラリー内では、マチェールを近視で見ると他にありま(写真2段目部分)。しかしここにこそ、十河の真意は隠されているのかもしれない。木を見て森を見ず、ではなく、森を見て木を見ず。「神は細部に宿りたもう」とはA・ワールブルグの1925年の発言であるが、作品の細部を見ると、丁寧に綿密に計算高く、しかも大胆に躊躇なく体に身を任せている。正に個の集積が国家であり、言葉は原初的な発音に回歸する。

F・テニースの共同体の発想に、ゲマインシャフトという家族単位から、ゲゼルシャフトという人類という巨大な単位の定義がある。十河がこれを前提としているとすれば、キャンパスの裏を表面とした《戦争八頭ノ裏側二居ル》、《国亡軍》の作品と実際にこの作品を燃やしている現象を写真に写した《国亡軍》(撮影：柳下征史/柳下知彦)が気になってくる。M・デュシャンのように見えない物を音によって想起させること、ランドスケープアートのように行為を記録することと、十河の発想は極めて近いが遠い。十河はキャンパスの裏であっても表と同様に描いているし、燃やされた筈の作品が実際に展示されている。現実が目の前にあるのにない状況とは、今日の社会そのものなのである。

